

## エッセイ

## プリペイドカード

渡辺尚夫

昭和30年代から40年代は技術屋にとって非常に面白い時代だったと言えよう。NHKで人気の「プロジェクトX」や、講談社の「匠の時代」などに黎明期の技術屋が鮮やかに描かれている。新幹線を開発した話や、黒部ダムを造った男たちの話など、形があって国民誰の目にも分かり易いものを作り上げた陰には、素晴らしいアイデアと地道な努力が隠されている。表面では想像できないような些細なことが開発のネックとなり、それらを克服してゆく技術者に感銘を覚える。

村野まさよし著「バキュームカーは偉かった！黄金機械化部隊の戦後史」には、そんな技術者が登場する。自治体の清掃課長は、本庁へ戻れる間の任期中は日々の仕事を無難にこなすのが通例の中、この課長は違った。何と自動車メーカーに依頼してバキュームカーを開発してしまったのである。当時はまだ手に入りにくかった硬式テニスボールを、その要に使うなど、苦労話は面白くもあり、同じ技術者として羨ましくもあった。特許を取ってれば、大いに稼げたはずであったが、夢は世界の国々で、このバキュームカーを走らせることにあったのである。

実はこの課長が活躍したのが川崎市。その後、清掃工場の必要性を市長に説き、昭和30年代には用地を確保するなど、先見の明が評価され助役になる。そんな川崎市には、もう一人変わった技術屋がいた。土木屋なのに日本で初めて浄水場に制御用コンピュータを導入した男だ。時は昭和38年、新幹線が開通し東京でオリンピックが開催された前年のことである。当時の浄水場は全て手動式の時代、昭和33年札幌市に電子式計装システムが導入され、そろそろ電子計装での浄水処理が始まろうとしていた時代にコンピュータである。国内の大規模な水道事業体でも自動制御や計装化が流行語ようになって次々と取り入れる中、川崎市は、そんな彼の豊かな発想で一気にコンピュータを導入してしまった。当時の厚生省水道環境部長に言わせても、故障が多い、特殊技術者の育成等コストの面からもメリットがないと結論づけられていたコンピュータであるが、メリットが発生するのは10年先、それまで職員が勉強してくれたら満足と彼は回答している。その後、浄水処理のコンピュータ制御は、東京都朝霞浄水場、金町浄水場、大阪府村野浄水場へとつながってゆく。新しい技術が東京や大阪からではなく川崎で発生したことの意義は大きい。

そんな川崎市に、もうひとつ隠れた日本初がある。それがプリペイドカードである。ウィキペディア百科事典によれば、日本では昭和57年、旧電電公社がテレホンカードを作ったのが始まりとある。しかし遡ること15年の昭和42年、川崎市はプリペイドカードシステムを構築し実用化していたのである。それは水道局直営のプールでの話。プールの自動料金精算システムに、場内での飲食にも対応したプリペイドカードを採用した。カードと言っても腕時計のバンド状の磁気テープで、自動券売機に入金すると、プールの入場時刻と入金金額がテープに記録され、プールへはキャッシュレスで。中で現金が必要な場合、硬貨払出機にテープを入れ希望金額を入力すれば現金が出て来る。退場時に精算機にテープを入れると、入退場時刻からプール料金を計算し、テープへの入力金額と使用金額から精算金額を求めるというシステムになっていた。また一日の終わりには料金集計までやってのけるという懲りようである。当時自販機と言え、10円を入れると紙コップに一定量のジュースが出てくる噴水型ジュース自販機から、コカコーラの自販機初登場という時代。そんな時代にプリペイドカードシステムを発想し構築した先人のアイデアには頭が下がる。

日本の学生の学習意欲が国際レベルから見るとかなり低いというレポートが、国民に衝撃を与えている。当時から比べれば、何でもある時代、完成された時代なのかもしれない。そんな時代の申し子達に、往年の技術者魂は育たないのであろうか。遺伝子工学の発展、環境対策の分野、最先端科学など、技術者の時代から科学者の時代になったかのように見えるが、ロケットの先端にも、浄水処理にも素晴らしい発想と地道な努力の世界は続いている。若い諸君は、温故知新の精神で日本の技術を継承してゆく責任がある。